

同人雑誌を読む

中村賢三

『文芸きなり』六九号 「名古屋市」

「他人の物差し」西垣みゆき

人の物差しに振り回されるのではなく自分本位に生きていきたいという思いがテーマになっている。

物語は恭子と雅代の二人の視点で交互に書かれ、夫に先立たれた二人の共通した哀しさ寂しさと、それぞれの生き方が丹念に写し出されていく。雅代の独白では、「田畑が荒れ放題だの、後家になってどんな生活をしているだの無責任に言うのが世の中で、人は何もしてはくれない。だから私は自分の事より他は考えないことにした」雅代のこの生き方は、夫を亡くしたあと、三

年後に田川と暮らすようになり、次に伸介という二十も年下の男、さらに笹山という建築会社の男へと遍歴する。

隣家で雅代よりひと回りも若い恭子も、そんな雅代を見ていた恭子も、さすがに雅物と見られていた恭子も、さすがに雅代の生き方への不快感がしだいに薄らいでいく。恭子も自分の道を歩いていくことが賢明だと悟るのである。描写力が巧みで思わず引き込まれ読ませしてしまうのだが、視点の移動について、ひとつ気になることがある。主人公恭子の側からばかりでなく、雅代の側からも書くことで、より深く表現できたという利点はあるが、リアリズムの観点から考えると、視点がくるくる変わる、神のような目はあり得ないと思える。小説技法はいろいろあって、書く素材によって技法を変えることに異論はないが、純文学として書こうとする

ときにそのように都合の良い表わし方は納得できない。これは筆者の拘りにすぎないものだろうか。

『文芸中部』八二号 「東海市」

「午後七時のドラマ」堀井清

独特の描写法を貫いて書かれている。登場人物と語り手を捉えるカメラが等間隔に置かれ、どちらかに偏ることなくオートマチックに各人物を俯瞰していく。したがって作者は表面に現われることはない。読み手にすべての判断力が委ねられている。この小説を読み解くのは読者の力量しだいだと言われているようだ。

現代の家族関係は一見安定しているかのように見えるが、いつ壊れるかわからない不安定な要素もはらんでいる。この家族の一角を担っていた、かつての長、高齢者の立場はどうか。老

人は夫婦そろって何時までも健康であるわけではない。ひとり残された場合や痴呆となつてなお生き長らえることもあるかもしれない。その面倒は家族で看ることができらうか。もろもろの社会問題を、個人的なまなざしで提起していることは確かである。

午後七時に一家の主である藤本昌也四十歳が書店で万引きをする。それを目撃していた男に二百万円を出せと恐喝される破目になる。昌也は父親の吾朗にだけ打ち明けて、男に会い要求された二百万円の半分で手を打つ。しかし脅迫に屈すると、それからは繰り返し威されるのが常套だ。案の定、男の友人がそのネタで威してくる。昌也は再び父親に相談する。次は父親の順番で、脅迫男との対決である。常識的な警察沙汰にはしない。老人はこの難局を如何に解決するか。老人は意外に

も刺身包丁を持って男に会いに行く。

——「私にできることは、もうこんなことしか残っていないのですよ」

老人は男にそう打ち明ける。無力で何の役にも立たない老人の精いっぱい、身を捨てても家族を守るといふいかにも大時代的な結び。悲哀とおかしみが混在した小説であった。

『札幌文学』七三号〔札幌市〕

「午後五時の空に」海邦智子

偶然にも時間に拘り、似通った題名の小説を読んだ。こちらは、ひたすら過去の私の時間に遡るもの。高校二年の夏の日、三つ違いの兄が交通事故で死んだ時間。その二年後、予備校通いに疲れた萌子は、地下通路の同じ場所にいつも座っているホームレスの初老の男と出会う。その男に寄せる十九歳の娘の、一方的と思える興味と関心が

募つて友情が芽生える。新鮮味のあるメルヘンチックな展開に、新しい小説という予感がした。

後半は筋書きを追い過ぎて、無理につきつまを合わせるように、この男を兄と同様に、交通事故に遭わせてしまふ。男が、萌子の誕生日のお祝いにと『アカシアの雨がやむとき 西田佐知子』のレコードを残したという結末。

前半とちぐはぐな展開には、肩透かしにあつたようで少し惜しいな、という感じが残った。

『民主文学』九月号〔東京都〕

「春雷」増田勝

毎年のことだが夏には繰り返し平和の尊さを思い起こさせてくれる。広島があり長崎があり、戦争が終わった日がある。亡くなった人を偲ぶ、盆の墓参りもある。ジリジリと照りつける

陽射しと蟬の鳴き声、時代を共有した世代が持つ心の原点がここにある。

九十四歳の母を見つめる主人公誠の現実。もう十二分に生きてと言って、

―「…こんなになるまで生きて迷惑かけて…死にたいよ、本当に死にたいよう」

母は泣きそうな声でそう言った。

私の身体じゆうに得体のしれない感情が走った。

理性ではどうにもできない状況まで追い込んだところを平易な表現で書ききっているところがすごい。

六年前に乳がんで亡くした妻が「死にたくない、やりたいことがいっぱいあるう」と叫んだ姿との対比。満洲からの引き揚げの途次、栄養失調が原因で死んだ幼かった妹とも重ねて、残された者の心の悲痛な叫び声が、雷鳴として比喩されている。

老いて病んだ母を書くことで、生きることの崇高な尊さを、しみじみと読むものの心に伝えていく。

『カプリチオ』三十号〔東京・名古屋〕

「国道沿いのぬるい海溝」谷口葉子

導入部にヒチコツクの「裏窓」を持つてきていて興味をひいた。そのように読み手を意識して小説の中へたやすく入っていきける仕掛けだ。

足にギプスをはめられ、身動きが出来ない状況だけが同じで、実際には映画とは大違いだった。美しい恋人グレース・ケリーも出てこない。主人公の女性（りり亜）は大怪我をした事故のいきさつを、ひたすらベッドの上で思い出そうとしているのだった。スタントマンのりり亜は忍者の扮装で屋根の上を走り、次の屋根へ飛ぶ瞬間に、―「何かを見て鋭く硬直し転落した」

その様子が繰り返し描写される。何かを見たという、意識の不確かさがこの小説の主題のように感じられる。以前付き合っていたオリオという男も、救急車に付き添ってくれた工藤さんというりり亜の分身と思える女性もまた模糊とした霧の中の存在にすぎない。そしていちばん身近にいて、意識もしていなかった岡部という男が、

―「酒と寿司、買って行くぞう。ケ―キもどうだ。退院祝いだからな」

と電話を掛けてくる。りり亜はオリオではなく岡部に、はなしができると彼がやって来るのを待った。

―「…ここは都会の深山幽谷。りり亜はぼんやりとだれかを待った。いっばいはなしたくないこと、聞いたことがあるのだった。」

りり亜を通し、無理をして、けれども必死に生活しているであろう都

会での女性たちの生き方、心情を見事に浮かび上がらせている。

『果樹園』十三号〔豊川市〕

「ちかと かんばん」早瀬ゆづみ

ちかという名まえの主人公が、かんばん方式と呼ばれる、あの製品管理システムに右往左往しながら、立ち働いているという小説であった。多種多様な品番と数量を切らすことのないように管理する現場が、どんなものなのか想像つかなかったが、スピード感のある文体と相まって、よく納得させられた。職場での人間関係など登場人物もきめ細かく書かれている。

職場結婚したちかの夫は新婚生活三ヶ月で交通事故死した。明らかに過労死によるものと思えたが、会社と争うよりも、穏やかに今の仕事を続けられる方をちかは選んだ。仕事や人間関

係を愛していたのである。この平穩さでは、小説としての面白さ、楽しさも薄いのではと思ったが、学生時代の友人三人との飲み会や、指輪のはなし、EGOTAという呼称、ねずみ講、そして詩人の高貴な精神のはなしなど、いずれも才気溢れる挿話があって、楽しく読むことができた。

『なんじゃもんじゃ』八号〔富里市〕

「ある失踪」小川禾人

四十年前に三十代半ばで失踪した友人の、最後の便りがあった「高野山真言宗総本山に入山し、専一修行する」ということばを手掛かりに、関西へ出たついでに高野山を訪れ、消息を尋ねてみようという小説だ。遠い思い出話でありながら、主人公とその友人、町田との交流が、古びることなく生きいきと描写されている。とくに東京駅の

普通列車の出発ホームで別れた時の印象が、その後の主人公の心に四十年の間、影を落としていたということ。

その別れがこの百枚を越える枚数を書かせた源となつていることなどを考え合わせると、物を書くという行為は、物語を作ることではない。人の心をなぞっていくものに違いないと、つくづく考えさせられてしまう。だから主人公はせっかく高野山にのぼっても、ついで消息を尋ねようとしなない。四十年前の友人こそ意味のある尋ね人であろう。主人公の人を捜す行動は、繰り返して行われるに違いないと思わせる。

『冥王星』十一号〔函館市〕

「静かな家」下田年恵

崇生は別居している妻に、退職金を払うから離婚届に判を押して欲しいと電話を掛ける。妻はその返事を待つて

くれという。別居のいきさつは、金沢で一人暮らししている、妻の母が階段から落ちる事故があり、看病に帰った妻がそれつきり帰らなくなったというだけで、心情的なもつれなどはない。

崇生は父と祖父だけの家庭で育った。父は刑事でほとんど家にはいなかった。祖父が亡くなったのを契機に家を離れた。都会で知り合った美千代と結婚したが、子供はなかった。やがて父も亡くなり、その父が老後にと買っただけの家の鍵が、崇生の手元に残された。しかしその鍵のことはすっかり忘れていたのだった。

崇生は定年となったのを機に、妻と住んだ家を引き払い、父が残していた家で住むことにした。その家は明治時代の古い家で、何代も住む人を変えたいらしい。古本屋も商っていたらしい。そのまま古本屋を父もしていたようだ。

父が座っていた肘掛け椅子に座ると、崇生には身体の奥から突き上げてくるものがあった。(父に対する悔恨・懐旧の思い)そしてある日、父の使っていた机の引き出しからノートを見つけ、そこに「母子共に無事、良かった。名前を崇生にしよう」と書かれた文を見つけた。崇生が生まれた年から書かれたノートであった。孤独に生きてきた崇生の人生にそのひとことがどんなに救いあったかが痛いほど伝わってくる。淡々とあらずじが書かれたような小説なので、筆者もついそれをかいつまんだような書き方になってしまった。それほどストーリーは巧妙に語られているのだ。この静かな家に電話が鳴り出した。別れて暮らす妻とをつなぐ絆に違いないと思わせて終わる。この終章は実に効果的で明るいのだ。

『文芸思潮』三十号「東京都」

「ここにおる。」野見山潔子

同人雑誌優秀作として『季刊午前』から転載されたものを読んだ。文芸思潮・全国同人雑誌振興会が行っているまほろば賞の候補作品6作の中に含まれていた。正直にいうとこの6作の中で、筆者としてはいちばん心に残った小説であった。

家を出て行き、別の女の家で暮らしている夫からの携帯メールで

「おふくろさんが死んだ。警察から連絡。すぐ実家に帰れ」

全体に簡潔で隙のない文章と描写、久しぶりに作者の気持ちが変わり移っている小説と出会ったと思った。

ふるさとの家で、一人暮らししていた母の急死で、空き家になったその家に秋子は帰って暮らし始める。その家は母や父と過ごした思い出がいっぱい

詰まっていた。この家を出ることになった頃のこと、母との確執などの日常が、非日常か妄想かと思わせるほど巧みに描写されている。

過去と現実を往還しながら、農村が変貌していく様子もさりげなく重ねられていく。薄情な夫に対しては、幼馴染の実直な男を登場させているのだが、この城島に、秋子は自分のケータイ番号をそつと教える。という一文もしるばせている。ふるさとのこの家で秋子は挫折することなく生きていくに違いないと思わせる。

うまい小説が賞を獲得するとは限らないとあらためて思った。読み手の好みもあるし、感動するところも様々に違う。小説には普遍性ということばはあてはまらない。あるとしたら、より多くの人に感動を持続させる魔法を、書き手が手に入れたときだろう。

【紀行文・エッセイ】

「神々に導かれて」岡田雪雄（日進市）

副題に「熊野古道歩き記」とあり興味をそそられた。中上健次の小説を持ち出すまでもなく、熊野には惹かれるものがある。先ごろ中田重頭の「叛逆の牧師、宇都宮米一異聞」を読んだばかりで、その観をますます強めていた。

岡田雪雄さんの旅行記はこれで三冊目、歩いた後にこうしてこまめにメモを取り、感想を書き記された。宗教心もない自分が何ゆえに神社仏閣を巡っているのだろうかという口癖は、すでに求道者の気持ちと重なっているように思われる。熊野の歴史をひも解き、民俗を知って歩いた人でなければ味わうことのできない神秘性すらはらんでいる。独自の感性で手づくりの旅行記を出版される作者に心から声援を贈りたい。

『女人随筆』一一八号（岡山市）

この雑誌の井久保伊登子さんから頂いた『長瀬清子』は今でもときどき同人会で話題になる本である。今回の巻頭「場所の記憶を遡る」井久保伊登子は、これまでの日本の歴史書は咀嚼するのに苦労したが、近刊書では「それぞれの時代を日本各地で生きた様々な階層の人々の生活が、地図や写真を添えて語られ、想像力を刺激される」と出版界が変わってきたことを示唆。そして「場所の記憶を遡る」ことに新たな意欲を燃やしておられ、頼もしい限りだ。

小合千絵子追悼特集では遺稿集『宝伝日記』を読んだ文などが並んでいたが、同人たちの文があまりに細やかで美しく優しいのに心が洗われる。

『私人』六十五号〔東京都〕

「出自を探して」長野統

エッセイ風の切り口で、わが姓の出自を探して熊谷市・伊勢市を巡り、国会図書館などでの史資料を読み込むという労作である。一つの出来事が史料で明らかとなり、歴史の縦糸と横糸が判明していく過程は、門外漢でも興味をそそられる。伊勢神宮と檀家とを結ぶ、御師職というものが存在し、それがお伊勢参宮の実態でもあったとの説を知った。村々から何故に伊勢へと繰り出して行ったのか、その背景に思いを巡らせるとき、壮大な物語の糸口を作者が手にされたように思えた。

各地の同人雑誌には、さまざまなお見や出会いがあつて読むのは楽しい。身勝手な読み方と開き直つて書いた。

『弦』86号掲載のものを一部改変して転載